THOMAS HARDY

20世紀英米文学案内 4

Thomas Hardy

ハーディ

本多顕彰 編

KENKYUSHA

20世紀英米文学案内　4

ハーディ

1969年3月1日　初版発行
1974年5月31日　3版発行

編　者　本多顕彰

発行者　小酒井貞一郎

印刷者　小酒井益三郎

発行所　研究社出版株式会社
162 東京都新宿区神楽坂1の2
電話 東京 (269) 4521-5 番
振替口座 東京 83761 番

印刷　研究社印刷
美術印刷　大平舎
製本　新栄社製本
製函　加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

1398-105004-1860

目　　次

人と生涯 / 本多顕彰　1

作　品

『狂乱の群れをはなれて』/ 森松健介　28

『帰郷』/ 高畠文夫　46

『カスタブリッジの町長』/ 上田和夫　68

『ダーバヴィル家のテス』/ 小松原茂雄　94

『日陰者ジュード』/ 吉川道夫　116

短　　編 / 山本和平　138

「幻想を追う女」「町の仲間たち」「合い間の出来事」
「グリーブ家のバーバラ」「リールのヴァイオリン弾き」

『覇王たち』/ 加納秀夫 161

詩 / 加納秀夫 174

『ウェセックス詩編』『過去と現在の詩』『時の笑い草』
『環境諷刺詩』『新・旧抒情詩集』『人間模様』ほか

評　価 / 大澤　衛 201

年表・書誌 / 藤井啓一・大澤　衛・上田和夫 巻末 1

索　引 巻末 47

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

人と生涯

少年時代

トマス・ハーディ（Thomas Hardy）は一八四〇年六月二日にドーセット（Dorset）のスティンズフォード（Stinsford）で生まれた。生まれたとき死んでいると思われて打ち捨てられていたのを助産婦が、まだ生きているといって手当をしたので助かった。この助産婦がその時そこにいなかったならば、イギリスは代表的な文豪を一人失うところだった。祖先には、トラファルガーの海戦のときにヴィクトリー（Victory）号の艦長として戦ったトマス・ハーディがいたが、小説家のハーディの父は石工頭であった。彼は教会音楽やダンスが好きであった。その点で息子に通じるものがあったといえばいえる。母はジェマイマ（Jemima）といって、貧困な家庭の子であったが、ひじょうに読書好きであった。

ハーディは幼い時から読書をし、音楽を愛し、ヴァイオリンの調子を合わせることができた。生まれつき虚弱で、育つまいと思われていたが、八歳ころから体が丈夫になり、学校へ行けるようになった。そのころ彼の母は彼にドライデン（John Dryden）の『ヴァージル』（*Virgil*）、ジョンソン（Samuel Johnson）の『ラセラス』（*Rasselas*）などを読ませたが、その中にナポレオン戦争を扱った『戦争史』（*A History of the Wars*）という定期刊行物があった。あるいは、この時、すでに『ラッパ隊長』（*The Trumpet-Major*）や『覇王たち』（*The Dynasts*）の種子が彼の心に蒔かれたのかもしれない。

一六歳のころ、彼はフランスやラテンの古典に興味を持ち始めたが、そのころ彼はジョン・ヒックス（John Hicks）という建築家に才能を見出され、その弟子になった。ハーディの父は石工の頭としてこのヒックスの設計を実施していたのである。このヒックスは古典を愛し、そのうえ親切であったので、ひまなときには、読書好きのハーディに読書の時間を与えた。ハーディはそういう余暇のほかに、朝勤めに出る前の五時から八時までを読書にあてていた。

この頃の彼は、精神的には早熟であったが、肉体的にはおくてであった。のちに当時を回想して彼は、

「私は一七歳まで小児であり、二五歳まで青年であり、五〇歳近くまで若い男であった」と言っている。

模索時代

いわば二つの道を歩いていたハーディは、一八六二年になると、建築に専念する決心をして、ひとりでロンドンに向かった。そして生涯の友のアーサー・ブロムフィールド (Arthur Blomfield) と知り合い、共同で仕事をすることになった。そのころのロンドンはディケンズやサッカレーのロンドンであった。ハーディはスウィンバーンやテニソンの行きつけのレストランやクラブで食事をとった。建築に専念するといっても、好きな道であったから、彼は音楽を愛好し、ヴァイオリンを買いもした。そうしている間に、文学に対する志向がまたもや頭をもたげ、一八六五年頃までに詩を書き始めており、一八六六年までには、詩稿を雑誌に送っている。このころ彼は散文にも手がけているが、これは彼の小説の芽ともいえる。しかし彼は、自分の詩が編集者にはわかってもらえないと思って、ひそかに書きためていた。そして、詩を小説よりもすぐれた芸術と考えていた。

ロンドン滞在中にハーディはたびたびナショナル・ギャラリーを訪れて大家たちの絵を鑑賞したし、またドルーリー・レイン (Drury Lane) でフェルプス (Samuel Phelps) が演じたシェイクスピア劇を観たし、またディケンズの自作朗読を聞きに行った。

しかし彼は、建築家として名を成すための都市生活にどうしてもなじめなかった。彼はそろそろ田舎へ帰ることを考え始めた。ブロムフィールドは、野心を持ったものが田舎に定住するのは誤りだといって、翌年一〇月までには再びロンドンに出るという条件をつけて賛成した。

帰郷して彼が感じたことは、都市生活が機械的で単調で、従って人間を孤独におとしいれるということだ。都市生活を知った彼は、それと田園生活とを対照してながめて見ようと考えた。彼はみずから意識しなかったが、社会小説を意図していたのである。

彼はヒックスの事務所で働いていて小説を書き始めた。題名は『貧乏人と淑女』(*The Poor Man and the*

Lady) というのであった。彼は詩を労力の浪費として、一時的に放棄し、これまであまり気の進まなかった散文を書いたのである。

一八六八年六月一七日の日記に、ナポレオン戦争を主題にした、かなり詳しい叙事詩の輪郭が見出される。してみると、『覇王たち』の構想が早くもこの時に始められていることがわかる。世間の人は、ハーディの活動はもう終わったと評されていたときに突如『覇王たち』が現われて驚いたものだが、それは一九〇三年に突如現われたのではなく、実に、少なくとも、その三五年前から彼の心の中で暖められていたのである。

ハーディは『貧乏人と淑女』をマクミラン（Macmillan）社へ郵送したが、内容はマクミラン向きのものではなかったので、改めてチャプマン（Chapman & Hall）へ送った。チャプマンはハーディに出版費として二〇ポンドを負担させて出版することを約したが、出版に先き立って、「貴下の原稿を読んだ紳士に会ってもらいたい」と言って来た。行ってみると、紳士というのはジョージ・メレディス（George Meredith）であった。メレディスは、この本の出版はきまったが、これから文学の仕事をやるなら、このように主張を鮮明にしない方がいい、きっと四方から攻撃を加えられて、葬られてしまうだろうから、と忠告した。事実、この小説の中では、貴族、ロンドンの社交界、中産階級の俗悪さ、近代キリスト教が痛烈に攻撃され、著者の意図が社会改良であることが明白であった。メレディスは、この小説は書き直すか、しばらくは抑えておいて、純粋に芸術的な作品を書くかした方がいいという忠告をした。

ハーディは出版を思いとどまったが、原稿はどう処理されたかわからない。彼は、メレディスの忠告を文字通りにとり、社会攻撃の筆をおさめて、ひじょうにセンセイショナルなプロットの『非常手段』（*Desperate Remedies*）を書いた。

この年（一八六八年）の冬に、彼の建築の師匠ジョン・ヒックスが死に、あとをついだクリックメイ（G. R. Crickmay）の懇望により、ハーディは彼を助けることになり、ウェイマスの事務所へ移った。彼は次の文学的仕事までの数カ月を割いて建築の手伝いをするつもりであったが、そうもいかなかった。彼はウェイマ

スに下宿し、海で泳いで、ロンドンで失った健康をとりもどし、一〇歳以上も若返った。一八六九年の二月に彼は田舎の家へ帰って、そこで『非常手段』の原稿に専念した。

一八七〇年にハーディはエマ・ラヴィニア・ギフォード（Emma Lavinia Gifford）に会い、一八七四年に結婚した。彼女は牧師の娘で、ひじょうに信心深かった。

一八七〇年五月にハーディは『非常手段』の出版を拒絶する旨の手紙をマクミランから受け取り、今度はそれをティンズリー（Tinsley）社へ送った。『非常手段』はメレディスの忠告に従って書いたのだから、彼が顧問をしているチャプマンへ送るべきだのに、なぜハーディがそうしなかったのかわからない。ティンズリーからの返事が来るまでハーディは博物館や画廊を見て、時を過ごしていたが、六月のある朝ハイド・パークを横切っていて、ディケンズの死を知った。

一八七一年三月に、ハーディが七五ポンド負担することにして『非常手段』は出版され、『アシニアム』(*Athenaeum*)、『モーニング・ポスト』(*Morning Post*)二誌は称賛したが、『スペクテイター』(*Spectator*)誌が、この小説にあるように身分のある未婚の女が私生児を生むなどということはありえないとして真向うから攻撃を加えた。ハーディは死にたいと思った。彼はこの瞬間のにがさを生涯忘れなかった。

夏になるとハーディは『緑樹の陰で』(*Under the Greenwood Tree*)を書き上げた。いうまでもなくこの題名はシェイクスピア(『お気に召すまま』第二幕五場一行)から取ったものである。ハーディはそれをマクミランに送ったが、前書で神経過敏になっていたため、返事を読みちがえ、てっきり断わられたものと早合点し、原稿を取り戻して、他の出版社へ送ることになった。しかしそれは後のこと、マクミランから断わられたと思ったハーディは落胆のあまり、小説書きはふっつりやめて、今後は専ら建築家として立とうと決心し、それを未来の妻ギフォードに相談したところ、彼女は彼があくまで文筆をつづけることを希望し、文筆こそ彼の天職だといって彼をはげました。彼は、彼が建築をつづければ収入も多くなり、結婚も早くできるのに、それを犠牲にしてまでも彼の志望を守らせようとした

ギフォードの熱意に動かされて、それに従うことにした。危うく文豪が消されるところだった。

彼の年来の友であり、学者であり批評家であったモウル（Horace Moule）もまたハーディの文筆家としての可能性を確信して、ペンを棄てるなと強く勧告した。やがて、『非常手段』が五〇〇部刷られて三五〇部売れていることがわかり、六〇ポンドの小切手が送られて来た。ハーディがやや気をよくしたところへ、ティンズリーが次の小説を出したいと申し入れた。そのようにして『緑樹の陰で』が一八七二年の五月に出版された。雑誌の批評では評判がよかった。彼はそれにはげまされて『青い眼』（*A Pair of Blue Eyes*）を書き始めた。そして翌年の五月末に出版した。

小説家としての地位確立

一八七二年一二月に、ハーディは『コーンヒル・マガジン』（*Cornhill Magazine*）誌の編集長レズリー・スティーヴン（Leslie Stephen）から手紙を受け取った。スティーヴンは『緑樹の陰で』を読んで感心し、『コーンヒル・マガジン』への寄稿を依頼して来たのである。ハーディは、『青い眼』を書きかけていたが、スティーヴンの求めに応じて、田園詩的な物語『狂乱の群れをはなれて』（*Far from the Madding Crowd*）を書くことにした（題名はグレイのエレジーから取った）。彼はスティーヴンにはげまされ、室内はもとより戸外でも書き、紙が手もとにないときには大きな葉や、きこりが切った白い木片などにも書いた。石にも、その他手当たり次第そこにあるものに書いた。油が乗っていた証拠である。

一八七四年一月の第一週に、かつて『非常手段』をくそみそにやっつけた『スペクテイター』誌が、『狂乱の群れをはなれて』をひじょうにほめ、これはジョージ・エリオット（George Eliot）の筆に成るのではないかと書いた。

一八七四年九月にハーディはエマ・ラヴィニア・ギフォードと結婚した。そして一一月に『狂乱の群れをはなれて』が出版された。

『コーンヒル・マガジン』が次の小説をといって来た。ハーディはようやく売れっ子になって来たが、何

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

を書くべきかを考えるひまもなくせき立てられた。彼は人気にも金銭にも無頓着であったが、人気作家となると、やはり人気のことを考えなくてはならなかった。しかし、それかといって読者や編集者の注文にはまるようなものばかりを書いているのはいやだった。彼は流行作家としては風俗を書いて読者の気に入らなくてはならないことを知っていたが、彼の関心は生の本質だけに向いていた。

このころ、彼はまた、技術は技術を隠すことだ、ということを考え、時折りの不正確な韻や旋律は、正確なそれらよりも遙かに楽しい、と思うようになった。

一八七五年の一二月に、のちに『覇王たち』となって具現することになるナポレオン戦争についての叙事詩のアイディアを記したメモがある。「メモ、一〇〇日のバラッド。それからモスクワのバラッド。それ以前の戦役のバラッド――一七八九年から一八一五年までのヨーロッパのイリアスを形作るもの」

一八七六年の一月にハーディは『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*) を書き上げた。これは、シェイクスピア以後、最もすぐれた喜劇として称賛された。バーナード・ショーたちの社会喜劇の先駆であった。

この年の五月、ハーディ夫妻はオランダに渡った。彼らはバーデンやシュワルツワルトを経てシュトラースブルク(現在のストラスブール)へ行き、そこから引き返してメッツを通ってブリュッセルへ旅した。ここでハーディは、『覇王たち』を念頭におきながらワーテルローの古戦場を踏査した。

そして帰国すると、彼らはドーセット・スタウア(Dorset Stour) 川を見下ろす綺麗な田舎家を手に入れて、そこで初めて家庭を持った。

一八七七年には『青い眼』がフランスの雑誌で好意的に批評された。ハーディは、たとえ金にならなくてもこのようなロマンスを書きたいと思った。

同じ年の六月のメモによると、ハーディの心の中で、『覇王たち』の構想がバラッドから壮大なドラマへと展開していることがわかる、――「ナポレオン戦争もしくはその他の戦役にもとづいた壮大なドラマ(シェイクスピアの歴史劇とはちがった)を考える。それは『ナポレオン』もしくは『ジョゼフィーヌ』また

は、他の人物の名で呼ばれてもいい」

一八七七年九月には、彼は新しい家で『帰郷』(*The Return of the Native*)を書き始めた。書きながら彼は、住み心地のよいこの田舎にばかりいてはいけない、作家はロンドンに本拠をおかなくてはならない、と考えた(この考えを彼はのちに訂正する)。そして彼は、一八七八年の二月に、三年契約で借りたアパー・トゥーティング(Upper Tooting)の家へ移って行った。

七月一二日に、ナポレオン・ボナパルトの弟の葬式を見に行って、ナポレオンの甥のナポレオン公の横顔を見て、はっとおもった。公は、帽子をかぶらないで、左右の腕に一人ずつ息子をかかえて歩いていた。顔色は、浅黒く、病的で、不吉ですらあり、顎は円く、突き出ていて、ボナパルトを思わせる顔つきであった。このナポレオンの甥の風貌は、『覇王たち』を書くときに、ハーディに大いに役に立った。この甥は、ある男がセーヌ川の橋の上で出会ったとき、ナポレオンの幽霊が出たと思って、びっくり仰天したというほど、叔父に似ていた。

有名になってからハーディは一九世紀の大家たち、カーライルやスウィンバーンやアーノルドやヘンリー・ジェイムズやブラウニングやテニソンに会っている。

一八八〇年七月には『ラッパ隊長』の出版契約がなされた。

一〇月一六日にハーディはケンブリッジを訪問して大いに歓待されたが、ひどく疲れ、それがもとで長わずらいをすることになった。

一八八〇年一〇月二三日に——この日に『ラッパ隊長』は出版された——ロンドンへ帰って来たハーディは、気分がひじょうにすぐれなかった。彼は執筆も訪客も一切断わって静養した。外科医が来て診察して、内出血が起こっているといった。

危険な手術が必要だと考えられたが、長く床にいられるようだったらその必要がないという診断だった。ところが、ちょうどそのころハーディは『熱のない人』(*A Laodicean*)を『ハーパーズ・マガジン』(*Harper's Magazine*)に連載し始めていた。ハーディは頭よりは下半身のほうを高くして横たわって、苦痛を忍びながら書いた。彼は出版社に損をさせまいという心づかい

と、彼の死後、何の貯えもなくて残される妻のことを思って少しでも多くかせいでおこうという配慮とから、無理をして書きつづけた。そして一一月以降は彼は妻に口述して筆記させ、それをつづけているうちに、苦痛も出血も去った。その間、妻は筆記と看護の両方を立派にやってのけた。

一八八一年三月二八日づけの次のようなメモがある、――「ナポレオンがアキレスのような人物として登場するホメロス的なバラッドを書くこと。(以下は考え直して書きかえたのであろう)史劇の方式。行動は大部分無意識的。反射運動。役者自身の意識に至るまでも、いわゆる動機なるものの結果ではない、表面上は常にそう見えるけれども。これらの理論の拡張を『一〇〇日』に適用」。これは書かれたものとしては、『覇王たち』の最初の哲学的計画である。

四月一〇日に、彼は前年の一〇月にケンブリッジから帰って以来初めて外出し、妻と医者といっしょにドライヴをした。この月の一九日にディズレイリが死んだ。五月一日に、ハーディは鉛筆で『熱のない人』を書き上げた。

一八八二年の秋に『塔上の二人』(*Two on a Tower*)を出版し、一〇月には夫妻連れ立ってパリへ行き、セーヌ川のほとりでアパートを借りて、そこに数週間滞在し、ヴェルサイユへ行ったり、ルーヴルやリュクサンブールで絵を見た。

マクス・ゲイト

一八八三年六月にハーディはドーチェスター(Dorchester)に移った。ここが残りの生涯を過ごす田舎の本拠となるのだが、彼は毎年春と夏との数カ月をロンドンで過ごした。田舎へ移ったことを夫妻は後悔したが、田舎は彼らの健康を大いに増進し、回復した活力で都に出て仕事をすることができた。

ドーチェスターでは適当な家が見つからなかったので、新しく家を建てることにして、コーンウォル直轄公領の一部を買い取り、そこで井戸を掘ると、ローマ占領時代の甕や骸骨が出て来た。一八八四年の一月に、ハーディはこの新しい所有地マクス・ゲイト(Max Gate)に木を植えた。

一八八五年四月一七日に、ハーディは一年前から書いていた『カスタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*) を書き上げた。そして一九日に「詩人および小説家の仕事は、最も壮大なものの下に横たわる悲哀と最も悲しいものの下に横たわる最も壮大なものを示すことだ」と書いている。

六月の終りにハーディは、ドーチェスターの仮り住まいから、新築成ったマクス・ゲイトの家に移転した。この家の敷地は一エーカー半であったが、のちに半エーカー買い足した。高台にあったので、朝日も夕日も見えた。ここでハーディは『森林地の人々』(*The Woodlanders*) や『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*) や『覇王たち』などの傑作を書いた。そしてここへは小説家のスティーヴンソン (R. L. Stevenson) はじめ多くの名士が訪ねて来た。

本来詩人になりたかったハーディは、心ならずも小説を書きつづけていて、『カスタブリッジの町長』を不出来な作品として、憂鬱な気分になっていたが、一八八七年に『森林地の人々』を書き上げたときに、特にうれしいとは思わないが、とにかく救われたと感じた、と書いている、苦役からの解放の喜びというわけなのだろう。しかし後年彼は、この作品を彼のものとして最高の出来だとしばしば話した。

仕事が一段落ついたのでハーディは妻を連れてイタリアへの旅に立った。彼はキリスト教的ローマよりも異教的ローマのほうに興味を感じた。一八八七年四月に夫妻はロンドンに帰着した。その年の六月二日はハーディの四七回目の誕生日である。八月にハーディはマクス・ゲイトに帰った。そして九月になると『覇王たち』の構想を新たにし始めた。他方において彼は内外の古典を読み漁った。驚くべき読書力である、例えばこんな本を——ミルトン、ダンテ、カルデロン、ゲーテ、ホメロス、ウェルギリウス、モリエール、スコット、『ル・シッド』、『ニーベルンゲン』、『ロビンソン・クルーソー』、『ドン・キホーテ』、アリストパネス、テオクリトス、ボッカチオ、『キャンタベリー物語』、シェイクスピアのソネット、『リシダス』、マロリー、『ウェイクフィールドの牧師』、「西風によせる歌」、「ギリシアの古甕によせる歌」、その他。

『テス』と『ジュード』

一八八九年八月に、ハーディは新しい小説を書いていた。題名はまだついていなかったが、これが『テス』である。そのころの彼のメモに「恋人のある人妻が良人を殺すときには、実際は良人を殺したいと思うのではなくして、その境遇を殺したいと思うのである」と書かれている。

『テス』を書きながらハーディは『覇王たち』のことを考えている、「ナポレオン、皇后、ピット、フォックスなどのアイディアを実行するためにはもっと大きい画布が要る。……妖怪の調子を採用しなくてはならない。……王たちの幽霊。題名は『諸王のドラマ』(*A Drama of Kings*)」。結局、題名は『覇王たち』(*The Dynasts*) に落ち着く。

一〇月に、書きためた分を『マレーズ・マガジン』(*Murray's Magazine*) へ送ったが、不道徳なことが露骨に書いてあるという理由で送り返されて来た。そこで『マクミランズ・マガジン』(*Macmillan's Magazine*) へ送ったが同様の結果であった。ハーディは、不適当と思われる部分を削除して、それを取りのけておいて、後で単行本にするときに復元するという方法を思いついた。これでうまくやれると、ほくそ笑んだものの、この仕事は楽しみのない苦役だった。そして雑誌には二度と書くまいと思った。

一八九〇年一月二九日に、彼は「神をさがし求めて五〇年になる。もしも神が存在するなら、発見しそうなものだと思う。もちろん客観的人格としてだ——言葉の唯一の真の意味」と記している。彼の宗教観がうかがわれる言葉として注目に価する。彼は、非難されたように無神論者であったか。

その年五月にハーディは短編集『貴婦人の群れ』(*A Group of Noble Dames*) の原稿を『グラフィック』(*Graphic*) 誌へ送った。これは翌年の正月に一冊の本にまとめられた。

ハーディは八月とそれにつづく秋の大部分を費して、単行本にするために『テス』の復元と修正とに従事した。その間に、九月には、スコットの小説の場面となった地方を見てまわった。その年の暮れに、『グ

ラフィック』連載中に起こった事件が当然予想させる事件が起こった。編集長は、エンジェル・クレアが、テスと三人の乳搾りの娘を抱いて洪水の道を渡る描写に反対した。彼は、抱いて渡るのでなくして、手押し車にのせて押して渡ったほうが体裁がいいだろうといった。ハーディはその通りにした。それから、『グラフィック』誌はまたテスの赤ん坊が洗礼を受ける場面の描写を雑誌に載せることを拒絶したが、この部分は、のちにこの小説中最もすぐれていると人々によって推賞された。

『ダーバヴィル家のテス――忠実に描かれた清純な女』(*Tess of the D'Urbervilles: A Pure Woman Faithfully Presented*) は一一月三〇日に完全な形で出版された。この作品とこれにつづく作品とで、彼は小説の筆を断つことになるが、それはハーディにとって思いもよらなかった結果であろう。

彼は別種の仕事にとりかかった。彼はうんざりする復元と修正の仕事から解放されて、せいせいしていたところだったのに、また元の『テス』に呼び戻されてしまった。評判のよかったこの作品に、一部の批評家が中傷的悪評を加え始め、それにつられて、攻撃文が舞い込むようになった。この本が出版されるとハーディの神学的信念についてのある噂がひろがった。この小説の終り近くに、彼は、「不滅なる者の統轄者はテスをなぐさみものにすることを終わった」("The President of the Immortals had finished his sport with Tess") とあるが、最初の五語は、アイスキュロスの『縛られたプロメーテウス』からの訳語にすぎない。それに対して批評家は次のようにからんだのである。

「ハーディは、全能の神が、いやしい人間の感情を持ち、一切のものを悪に変え、自分のしたいたずらを楽しむものと仮定している」。別の批評家はこういう、「彼にとって悪は神秘や難問というよりは、むしろ彼の神の故意の悪意である」

ハーディはそれに答える文を書いたが、郵送しなかった。しかし、次のような草稿がある、「思考力のある読者には告げる必要のないことだが、私のものとされている滑稽な意見――すなわち人間の形をした部族神の原始的な信者たちの意見と同じ意見――を私はいだいていないし、いだいたことも決してない。……

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong